

平生往生

嘉徳郡稲築町 三宅 昌子

私は、朝鮮慶尚北道聞慶という、四方山に囲まれ、すり鉢の底を思わせるような盆地に50軒たらずの日本人が住んでいて、交通はバス、官庁関係はほとんどあり、静かで平和な町の郵便局長の娘として生まれ育ち、18才で終戦を迎えました。

忘れもしません、8月15日、その日は父は病床に臥し、母、姉と三人で、早めに精霊様を送って知人宅に寄りましたところ、奥さんから、大変なことになりましたと、涙ながらに終戦を聞かされ、急に身が凍りつき、地下に吸い込まれて行くような衝動にかられ、ただ茫然と立ちすくんでしまいました。天地がひっくり返ったとはこのことかと、今後どうなるのかとの心配をしておりましたら、町の面長さんから「親愛なる日本人の皆様、終戦になりましたが何も心配することはありません。同じ釜の飯を食べた仲間です。今までとおりの生活をして下さい」と放送が流れ、安心致しました。それでも、隣町の郵便局では、出勤すると日本人の出る幕じやないと、追い返されたとか聞き、ショックでした。家は局長代理が局員を集め、「終戦になっても今迄通り、いや、今迄以上に職務に励んで局長の家族を守ってほしい」と訓示があったとかで、何も変わらず平常通り営業しておりましたら、外部から非難があり、つめ寄られたらしいのですが、「何と言われましても、どうされてもかまいません。職務を放棄すると軍法会議に処せられるとの公文書も来ていますので、局長をお守りして勤めさせていただきます」と猛然とした態度で言われ、たじたじと帰られたと聞きました。局長代理は、私が生まれる前から勤め、私の産湯を沸かして下さった方で、頭も性格もよく、努力して学校にも入り、よく尽くしてくれました。

私の町では、保安隊が結成され、日本人を保護する名目ですが、世帯主は全員道路清掃等過酷な労働と集団生活を強いられ、家に帰ることができず、その見張りをしていました。私の家は父が病気なので、特別に保安隊長が、見舞いにこられ、「ゆっくり養生して下さい。お宅はそのまま、今迄とおりの生活を続けて下さい」とのこと、何だか淋しい気持ちでした。夜も何人か見回りにこられ、被害はありませんかと、何度も夜中でもこられるので、娘二人の身の危険を感じ、一夜は母が台所の地下室に布団を持ち込み、姉と二人寝た事を思い出します。それから、集団生活されているところに行き、御一緒させて貰いましたが、それからぼちぼち町におりづらく引揚げるようになり、私達2軒か3軒になり心細く、決心し、帰る準備に取りかかりましたら突然、郡庁から使いの方が平身低頭し、「実は今日進駐軍が町を視察にこられ、日本人の娘さんがおられたらサービスガールに」とのこと、「日本人は皆引揚げて、おりません」と答えたそうですが、一人口をすべらせ、姉と二人の事を言ってしまい、「恐縮ですがお願いします」と言われ、母もしばらく困惑し言葉がありませんでした。でも「私も一緒に参ります」と、母同伴で下着も重ねモンペで身支度し、決死の覚悟で参りました。

郡庁の会議室に入ると進駐軍20名程と郡の有志がずらりと並んで起立して、拍手で迎えて下さり、上座に通され、皆さん紳士的で、テーブルのお料理を盛って下さったり、スクラム組んで合唱して下さったり、やっと気がほぐれましたら、この次はお二人で合唱してほしいといわれ、しぶしぶ母に言われ、女学校の校歌を唄い、返礼し、お土産をたくさんいただいて帰りますと、父も心配して帰りを待っておりました。これでほっと、その日は終わったのですが、あとで聞いた話で、その夜「感じのいい娘さんで、気に入ったので、夜のサービスガールに」と、また難題を言われました。大変な事になったと色々考えた結果、一芝居して隣の町に行って貰うようにするため早速電話で「夜そちらで歓迎会を催してほしい」と頼み、承知していただき、観光に行かされている場所迄追いかけて行き直接隣り町に行く様にされたと聞き、本当に胸撫でおろしました。

色々な事があり、11月には、送別会、餞別、見送りと最後まで、皆様から親切にしてください、姉が縫ってくれたリュックと柳行季に詰め込み、父には着替えと薬を入れ、病弱な父のためリュックの上に、羽根布団を私達3人が巻きつけるようにのせて、家を出ました。住みなれた我が家を何度も振り返りながら、涙で曇って見えなくなる迄、持てるだけの荷物を持って聞慶を後にしました。父は、どんなにか、つらかったことと思います。今思っても胸がつまります。両親の愛にはぐくまれ何不自由なく生活しておりましたが、終戦になりつくづく人間・平生往生が如何に大切かを教えられ、父母に感謝しました。家は現在も民家として実在しているそうです。

途中、店村の町でバスを降り、待合室で汽車を待っていると、知らない人がどやどやと来て、荷物を空け目ぼしいものを取り、逃げて行き、吃驚しましたが、どうする事もできず、残った品物をまとめ汽車に乗り込み、途中、金泉で知人宅で1週間滞在し、元気をとり戻し、釜山に向かいました。貨車に荷物と一緒に詰め込まれ、釜山港は目の前に見えているのですが、前進したり、バックしたりを何回も繰り返し、どうなるかと生きた心地はしませんでした。やっと下車し、大きな倉庫に入れられ、乗船できる日を待ちました。

荷物を両手に背中には大きな布団袋、首には食糧を持っておられる方、子供さん、赤ちゃんを海に棄てた方、気がたって喧嘩してる方等々、乗船までも大変な事ばかりでした。私達は仙崎に上陸し、荷物の検査、消毒をすまし、特大のおむすびとお漬け物をいただき、近くの呉服屋さんで休ませていただき、御苦労さまでしたと、おいしいお茶にお御馳走、お風呂と色々して下さり、やっと内地に帰って来たのだと安心しました。

それから母の里である嘉穂郡碓井町の駅に着き、従兄弟が迎えに来てくれました。ほっとしました。夫婦から大変よくして貰い、今でも御恩は忘れません。財産の申告も英文、和文で、何回も母が福岡に行き、やっと提出しましたが、何にもならず、国債だけでしたけれど、父は22年2月13日引揚げの無理もあり、大雪の夜、息を引き取りました。一度も怒られた事がなく、人望厚く温厚篤実な父でした。皆さんと父母のお蔭で、今日があるのです。